

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私の詩友・川崎洋さんの作品を取り上げます。川崎さんの「夜」という作品の中に、こういう二行があります。

橙色の月めがけて  
すぼんと海を脱ぐ魚

これは月夜に魚が海中から海面へ躍り出た様子ですが、私は「すぼんと海を脱ぐ魚」という表現がたまらなく好きです。

「海を脱ぐ」と表現されているので、海中の魚がふだんは素肌で巨大な海を着込んでいることがわかり、魚が全身を撓めて海を脱ぐときの、しなやかなひねりと力強さまで感じられます。

これが仮に「海面に魚が躍り出た」という表現だったら、どうでしょう? 「海を脱ぐ」という表現から感じられるような、魚と海との親しい関係や魚の生動感が全く伝わってきません。

海の魚がふだんは海を着ているという羨ましいようなことを「すぼんと海を脱ぐ魚」は一瞬、鮮やかに気付かせてくれるのではないのでしょうか。川崎さんの作品をもう一つ挙げます。「どうかして」という作品の中に、こういう箇所があります。

鳥  
お前が雲に消え入るように  
僕がお前に  
すっと入ってしまうやり方は  
ないかしら  
そして  
僕自身も気付かず  
身体からだの重みを風に乗せるコツを  
僕の筋肉と筋肉の間に置けないかしら

A

2 「すぼんと海を脱ぐ魚」という表現とあるが、この表現から感じられることについて本文中で筆者が述べている内容を、次のようにまとめた。

Table with 2 columns (a, b) and 2 rows (魚が全身を撓めて海を脱ぐときの、しなやかなひねりと力強さというなことに気づき、 a が感じられる。 b まで感じられる。)

3 ②には、詩の表現についての筆者の考えが入る。次のうち、入れるのに最も適しているものはどれか。一つ選び、記号を書きなさい。

- ア この仮定が詩の表現を変化させるために必要な仮定だと思う
イ この硬さが詩の表現を知的なものにすることもあると思う
ウ この違いが詩の表現と普通の文章表現との違いだと思う
エ この比較が詩の表現の偶然性をあきらかにすると思う

4 飛ぶことに必要な手続きをあれこれと考えているとあるが、「飛ぶことに必要な手続き」とはどのようなことか。A中のことばを使って四十字程度で書きなさい。

5 ④この詩の魅力とあるが、次のうち、この詩の魅力について本文中で述べられていることから内容が合うものはどれか。一つ選び、記号を書きなさい。

- ア この詩は、強い飛翔願望をもっている若い人への共感を表そうとしているが、空を飛びたいという欲求を表現するのみに有りふれたことばを使っているだけで、想像力をかきたてる作品であること。
イ この詩は、ユーモアを感じさせる表現が多く使われていて空を飛ぶことができるような気分になるが、実質は飛翔願望ではなく、その願望の奥にある自由へのあこがれを表している作品であること。
ウ この詩は、鳥のように自由に空を飛びたいという飛翔願望を他人に聞かせるのではなく、空を飛んでいる鳥に話を打ちかけるように表現されているところに、謙虚さが感じられる作品であること。
エ この詩は、人間の気持ちの中にある飛翔願望を自分本位に訴えるのではなく、丁寧な話の持ちかけかたをしているので、飛ぶことを一緒に考えてみようという気を起こさせる作品であること。

ご注目いただきたいのは終わりの二行です。身体の重みを風に乗せるコツを、僕の筋肉と筋肉の間に置けないものだろうか。もしそれが出来れば、鳥のように空を飛ぶことが出来るわけだなあ、飛んでみたいなあ、というわけです。私は以前、十年間ほど高校生の投稿詩を読んだことがありますが、その作品の中で「鳥のように自由に空を飛びたい」という言葉に頻繁に出会いました。人間の気持ちの中に飛翔願望があり、特に若い人の間にその欲求の強いことはわかりますが、「鳥のように空を飛びたい」だけでは、あまりにも有りふれていて切実感が伝わってきません。

そこで、詩の引用箇所をもう一度ご注目いただきましょう。ここに「空を飛びたい」という言葉はありませんが、実質は飛翔願望そのものであること。しかし、空を飛びたいと言う前に、飛ぶことに必要な手続きをあれこれと考えているところに、なんととも言えないユーモアと謙虚さを感じます。

「空を飛びたい」という願望を仮に他人から聞かされた場合、私達は「ああそうですか、どうぞお好きなように」とでも言うほかはありませんが、この詩の場合のように「身体からだの重みを風に乗せるコツを／僕の筋肉と筋肉の間に置けないかしら」と持ちかけられた場合は、それが幻想とはわかっていても、私達は川崎さんと一緒にあって、飛ぶことを考えてみたくなるような、そんな気分になってしまいます。ここがこの詩の魅力なのです。

詩を通じて私達は、ああしたい、こうしたいという思いや望みを訴えるだけに終始しがちで、自分本位になりやすいものですが、訴えを聞く人が一緒にあって考えてくれるような、丁寧な話の持ちかけかたが大事なのだということを、このすばらしい作品から感じ取っていただきたいものです。

- 1 本文中の次の漢字の読み方を書きなさい。
① 躍り出た
② 箇所
③ 頻繁

6 本文では、筆者は二つの詩の魅力を紹介している。次は、「鉄棒」という詩と、その詩の魅力を紹介する文章である。I に入ることばを「鉄棒」という詩の中から抜き出さない。また、II に入れるのに最も適していることばをア〜エから一つ選び、記号を書きなさい。

僕は地平線に飛びつく
僅わずかに指さき引つかかった
僕は世界にぶら下った
筋肉だけが僕の頼みだ
僕は赤くなる。僕は収縮する
足が上つてゆく
おお、僕は何処へ行く
大きく世界が一回転して
僕が上になる
高くからの俯瞰
ああ、両肩に柔軟な雲
(村野四郎『体操詩集』による)
(注) 俯瞰＝高い所から全体を見ること。

【紹介する文章】
この詩に描かれているのは鉄棒の逆上がり運動の様子です。ここではまず、鉄棒をIと表現しています。さらに、顔を真っ赤にして体を引き上げ、鉄棒の上に静止するまでの様子を「大きく世界が一回転して」ということばを使って表現しています。そして、この詩全体からは、空間的な広がりとしてIIとがよく伝わってきます。

- ア 逆上がり運動の難しさ
ウ 大空の雲のやわらかさ
イ 「僕」の動きの力強さ
エ 「世界」全体の複雑さ

二 次の(1)〜(6)の文中の傍線を付けたカタカナを漢字で書きなさい。

- (1) 実行する前にケイカクを立てる。
(2) 集合場所はエキの改札の前に決まった。
(3) よい話を聞いてコウフクな気持ちになった。
(4) 自分の意見をジュンジョよく話す。
(5) マドを開けて戸外の空気を部屋に入れた。
(6) 友人のチュウコクにしたがう。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

にしとみといふ所の山、絵よくかきたらむ屏風をたてならべたらむやうなり。片つ方は海、浜のさまも、寄せかへる浪の景色も、いみじうおもしろし。もうこしが原といふ所も、砂子のいみじう白きを二三日行く。「夏はやまとなでしこの濃く薄く錦をひけるやうになむ咲きたる。これは秋の末なれば見えぬ」といふに、なほところどころはうちこぼれつつ、あはれげに咲きわたれり。もうこしが原に、やまとなでしこしも咲きむこそなど、人々をかしがらる。

〔注〕もうこしが原＝現在の神奈川県東部一帯の海岸。「もうこし」は、昔、わが国で中国をさして呼んだ名稱。

- 1 絵よくかきたらむ屏風の意味として次のうち最も適しているものを一つ選び、記号を書きなさい。
ア 絵を何度も描き直した屏風
イ 絵をじょうずに描いた屏風
ウ 絵を描き切っていない屏風
エ 絵を片側だけに描いた屏風
2 いみじうを現代かなづかいになおして、すべてひらがなで書きなさい。
3 いふにの本文中での意味として次のうち最も適しているものを一つ選び、記号を書きなさい。
ア 言うけれども
イ 言うとすぐに
ウ 言うのを待って
エ 言うまでに
4 やまとなでしこも咲きむとは、「やまとなでしこの花が咲いたということ」という意味であり、「やまと」は日本を表すことばである。本文中で、人々はおもしろしが原に咲いている花に関して、どのようなことをおもしろいと感じたのか。その内容を現代のことばで四十五字程度で書きなさい。

こうで、なんとという小鳥なのか、ち、ちち、と危険を知らせるように啼くのを、少々煩わしく思っていたところ、ある日、レンゲツツジの蕾の綻び具合を見るつもりで、樅の木のむこうの笹藪をひと足ひと足漕いでいったら、目の前に小枝でお碗のような形に作った小鳥の巣が一つ、藪のなかに浮かんでいてしかも、その巣のなかでは、四羽の雛が黄色い口を一杯にひらいて餌をねだっていたのであった。

私は驚いて、せいぜい足音を忍ばせながらそこを離れたが、道へ戻ったときには胸がこれまでに高く高く鳴っていた。
あれは、なんとという小鳥の雛だったのだらう？ 三日ほどして、気になって、そっと覗きにいってみたら、親鳥たちが危険を感じてどこか安全な場所へ移したのか、それとも雛たちが巣立ったのか、巣は空っぽになっていた。

〔注〕点綴＝ものがほどよく散らばってまとまりをなしていること。
〔三浦哲郎「いとしきものたち」による〕

II 選択
すっきり春らしい季節になりました。いかがお過ごしでしょうか。わたしは、先生がよく話されていた「読書の大切さ」をいつも思い出しては、いろいろな本を読んで楽しんでます。

先日読んだ文章がとても気に入ったので、今日は先生にその内容をお伝えしたくなり、手紙を書きました。その文章の筆者は、年に二度ずつ胸のときめきを経験しているとき、もういちどは六月の中ごろにレンゲツツジという花の赤い花びらが見えたときです。咲き始めたころのレンゲツツジについて述べられている部分には「色」という比喩表現が使われているので、レンゲツツジの が感じられ、筆者が初夏の山麓の最も美しい彩りというのがよくわかるような気がしました。
そして、筆者は、去年はいつもの年よりもいまだ余計に胸のときめきを味わったと書いています。それは、レンゲツツジの蕾の綻び具合を見るつもりで出かけた筆者が、 を見て、驚いてそこを離れて道へ戻ったときのことでした。筆者は自然に包まれた暮らしの中でときめきを

四 高校生の石田さんは、中学生のときの担任の先生に、ある文章を読んで感じたことを伝える手紙を書きました。次の I は石田さんが読んだ文章で、II は石田さんの書いた手紙です。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

I 山麓のおおらかな自然に包まれて静かに暮らしていると、胸のときめきというものがあることさえ忘れていて、思い出すことも稀である。

けれども、全く思い出すことがないわけではなくて、私は年に二度ずつ、恒例のように胸のときめきを経験している。いちどは、真冬の夜。凍った雪に覆われている連峰の主峰が を浴びてぎらぎらと光り輝くのを眺めたとき。もういちどは、レンゲツツジの堅い蕾が割れてなかの赤い花びらが見えたとき。

この山麓一帯には、レンゲツツジが無数に自生していて、六月の中ごろからそろそろ花を咲かせはじめる。花は、日の当たり具合によって濃淡があるが、まず極色と赤を混ぜ合わせた炎のような色だと思えばいい。これが、芽吹いたばかりの灌木や笹藪のなかを、野火が走るように点綴する風景は、初夏の山麓では最も美しい彩りである。

ところが、このレンゲツツジの満開期を堪能したという人は、意外にすくない。その年の気象で開花の時期が微妙にずれるからである。満開になるのを待って山荘に一周間も滞在したが、痺れを切らして引き揚げたところ、その翌日に満開になった、などという話をよく聞く。

私自身も、巡り合わせが悪くて、長い間レンゲツツジの満開を見たことがなかった。堅い蕾がひとりりで割れて、なから懐かしい花の色がほんのり浮き出ているのを見ると、なぜか胸が微かにときめいてくるのをおぼえる。これが花になって咲き切るまでに必ず戻ってこよう、——そう思い固めて帰京するのだが、戻ってみると、大概、咲き疲れた花が残り火のように点々と枝先から垂れているばかりなのである。

去年は、珍しく、いつもの年よりいまだ余計に胸のときめきを味わった。門——といっても、表面をざっと焔に焙って焼き色をつけた丸太を三本立てただけの簡素なものだが、その門を出入りするたびに、そばの樅の木のむ

感じているのですが、わたしも日常生活の中で小さなことに対してでも胸のときめきを感じられるような日々を過ごしたいと思いました。
お忙しい毎日だと思いますが、お体にご注意ください。
敬具
平成二十五年四月十二日
山本文字先生
石田恵子

- 1 I 中の次の漢字の読み方を書きなさい。
覆 われて
濃 淡
簡 素
2 I 中の ① に入れるのに最も適していることばを、II 中から四字で抜き出さない。
3 I 中に「堪能した」とあるが、次のうち、このことばの I 中での意味として最も適しているものはどれか。一つ選び、記号を書きなさい。
ア 十分に満足した
イ 逃してしまった
ウ 待ち望んでいた
エ 見きわめられた

4 II 中の ② に入れることばを、I 中から抜き出さない。また、③ に入れるのに適していることばを十字以内で書きなさい。

5 II 中の ④ に入る内容を、I 中から読み取って四十五字程度で書きなさい。

五 「かけがえのないもの」とは、他に代わるもののない大切なものという意味のことばである。あなたにとって「かけがえのないもの」とはどのようなものですか。あとの条件にしたがって、別の原稿用紙に三百字以内の文章を書きなさい。
題名や氏名は書かないで、本文から書き始めること。
条件 あなたが「かけがえのないもの」と思うものを一つ考え、それを

選んだ理由をあわせて書くこと。

得点 <2> 作文	得点 <1>

得点	
----	--

受検 番号	番
----------	---

四				
( ) 点				
5	4	3	2	1
( ) 点	( ) 点	( ) 点	( ) 点	( ) 点
	⑥	⑤		㊦
				( )
			覆	( )
			わ	( )
			れ	㊧
			( )	( )
			濃	( )
			淡	( )
			( )	㊨
			簡	( )
			素	( )

三			
( ) 点			
4	3	2	1
( ) 点	( ) 点	( ) 点	( ) 点

二	
( ) 点	
(4)	(1)
( )	( )
ジ	ケ
ュ	イ
ン	カ
ジ	ク
ョ	( )
( )	( )
(5)	(2)
( )	( )
マ	エ
( )	( )
ド	キ
( )	( )
(6)	(3)
( )	( )
チ	コ
ユ	ウ
ウ	フ
コ	フ
ク	ク
( )	( )

一					
( ) 点					
6	5	4	3	2	1
( ) 点	( ) 点	( ) 点	( ) 点	( ) 点	( ) 点
II	I			b	a
( )	( )			( )	( )
				躍	㊦
				( )	( )
				り	( )
				出	㊧
				た	( )
				( )	( )
				簡	( )
				所	( )
				( )	㊨
				類	( )
				繁	( )

45

45

10

40

